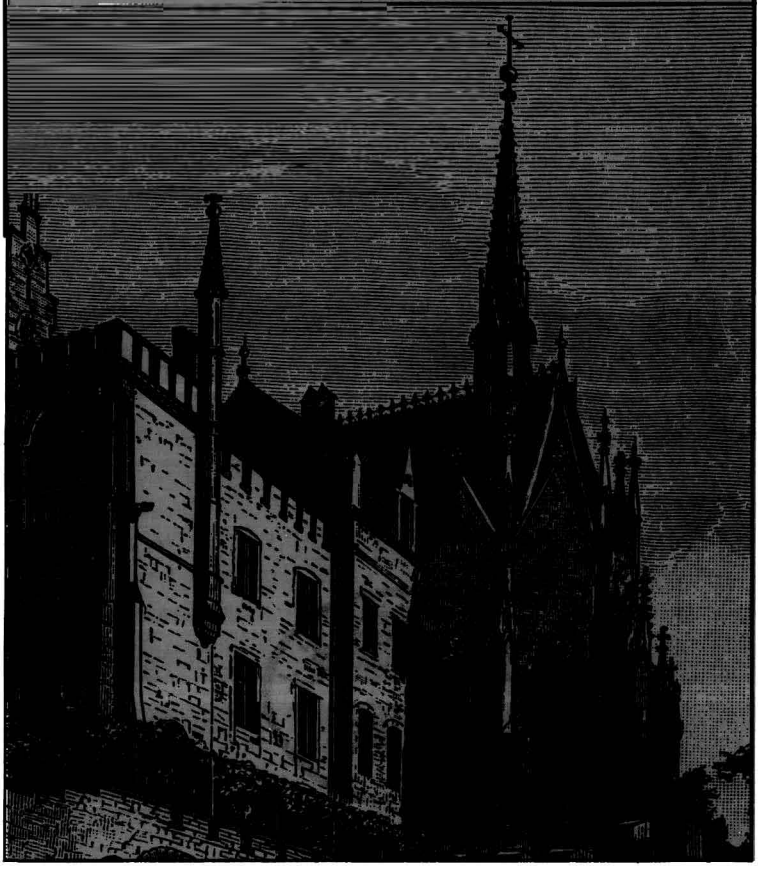
ドラキュラ小説集

吸血鬼ドラキュラ

ドラキュラ　ドラキュラ

種村季弘編



大和書房

ドラキュラ ドラキュラ
一九八〇年一月三〇日初版発行

編　者　種村季弘　©1980
発行者　大和岩雄
発行所　大和書房
東京都文京区関口一―三三
郵便番号　一一二
電話（三〇三）四五一一
振替　東京六―六四二二七

印刷所　信毎書籍印刷
製本所　東京美術紙工
装幀　長尾信
1397-870050-4406
定価　一三〇〇円

ドラキュラ　ドラキュラ／目次

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

吸血鬼――ジャン・ミストレル　種村季弘訳　7
グヅラ（抄）――プロスペル・メリメ　根津憲三訳　45
吸血鬼――ジョン・ポリドリ　佐藤春夫訳　59
吸血鬼の女――E・Th・A・ホフマン　種村季弘訳　89
カルパチアの城――ジュール・ヴェルヌ　安東次男訳　107
吸血鳥――マルセル・シュオッブ　種村季弘訳　123
サセックスの吸血鬼――コナン・ドイル　延原謙訳　131
吸血鬼――ルイージ・カプアーナ　種村季弘訳　159
吸血鬼を救いにいこう――ベレン　種村季弘・橋本綱訳　179
受身の吸血鬼――ジェラシム・ルカ　種村季弘・橋本綱訳　183
ドラキュラ　ドラキュラ――H・C・アルトマン　種村季弘訳　189
編者解説　209

ドラキュラ ドラキュラ

吸血鬼小説集

吸血鬼

ジャン・ミストレル
種村季弘訳

I

ときあたかも一七五七年、史上名高いロスバッハの会戦の当日のことであったが、わが軍にとってまことに不運にも、私は片方の脚に銃弾の一撃を受けて傷ついた。連隊付軍医がただちに弾丸を摘出し、わが軍が後退しながら戦っている間に、名は忘れたが、とある小邑の見た眼もかなり瀟洒な感じの館に私はひとり残された。彼の村民たちの介抱は手厚く、あまつさえ私の費用と彼ら自身の骨折りにたいしても適切な支払いが受けられるよう仲介の労をとってくれさえした。馬車による旅行が可能な状態になるや、私はボヘミアにあるテプリッツの湯治場に向けて出発した。そこでなら腕の立つ医師が見つかると、確かな筋から聞いていたのである。

テプリッツでは賑やかなメムバーの輝かしい社交界に遭遇し、えりぬきの富豪で人となりも高潔なハンガリーの若い貴族エルデリィイ伯爵と友誼を結んだ。伯爵と私とはともに双六（トリックトラック）に打ち興じ、彼が私の旅亭「ローマ皇帝館」を訪れぬ日とては一日もないほどであった。伯爵は、私が年代物のトカイ葡萄酒に不自由せぬよう配慮してくれたが、折あって私がこの葡萄酒の風味をわがフランス国産物と較べたところ、早速家令をプラーハに遣わしてブルゴーニュ葡萄酒の一箱（ケース）を献じてくれたものであった。ある日クラリィ王子公園で数行の詩句をしたためていたとき、伯爵に不意を襲われて、私はついに、二度か三度「詩神名鑑（アルマナ・デ・ミューズ）」誌に平俗体書簡詩を投稿した前歴を告白しなければならない破目にたちいたった。それが伯爵の精神に清新な印象をとどめたようであった。程なくして、あの無比

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

の善意と独特の言い回しで私の傷の消息を問うてきたヴォルテール氏からの短信を披露してからというもの、伯爵の眼に私はまったく別人となった。伯爵はハンガリーにあるその聖ミクロス城に是非とも客となってくれるようにと逼り、その懇請のあまり、私はついに招きに応ずることになった。数週間も滞在しようかと考えてのことであった。

城は、土地の人間にはティスツァ河と呼ばれているティス河から程遠からぬ、広びろとした平地の只中に建てられていた。河では、名は忘れたがさし渡し六フィートにも及ぶ巨大な魚が釣れ、その味は淡水産の敷香魚の味を思わせる。それはヴェルサイユ宮殿を模した平屋根造りの壮大な建築で、露台が庭園へ向って階段状に傾斜していた。フランスからやってきた夥しい建築家や彫刻師たちがそこで仕事をしていて、種々の花壇や迷宮庭園は有名なルノートルの構図に倣って設計されていた。地味が乾いていて多砂質だったので、さる技師の手でティス河から運河用水が誘致されていたが、この運河には小舟を浮べて散策することもできるのであった。数ある泉水には途方もない数に上る蛙が夜通しすさまじい鳴き声を立て、冬季にはその水上に夥しい渡り鳥が翼を休めた。城は、カラッシュや、レ・ドミニカンや、バットゥーニのようなイタリアの大画家たちの絶品を含む典雅な画廊、古銭類の豪奢な蒐集室、さらにはわがフランス選り抜きの著作家たちの著作を収めているのみならず、ウィーン宮廷図書館から定期的に新しい書物を補われているところの図書室を擁していた。

聖ミクロスの生活はこよなく快適であった。ほとんど毎朝のように、私は払暁に馬上の人となり、私たちは猟犬を駆って猟に遠出したり射撃に興じたりした。日が落ちれば談話の愉楽や種々の機知に富んだ遊戯に身を委ねるのであった。社交界の人士は数多く、私たちは舞踏に興じたり、小喜劇を演じたり、管絃楽を聴いたりした。伯爵は、エステルハーツィ家に仕えていたことのある、さるドイツ

人を楽長に召し抱えていた。この男はその楽団のためにはやや学究的にすぎて、フランス人の耳にはいくぶんハーモニーの固苦しい感じの楽曲を作曲するのであったが、いずれにせよ由緒の正しい、いまの境遇などよりははるかに実力ある人物であった。のみならず、音楽の技法に通じていることは驚嘆に値するほどで、たまたま私が作詩したいくつかのロマンスのための伴奏曲などまたたくまに編曲してしまうのであった。

伯爵は結婚しており、いまだにその夫人を熱愛していた。伯爵夫人は美しい声の持主で私は夫人とともにしばしばイタリア風二重唱を唱った。夫人の小間使いたちは愚かしげなところがまったくなかった。ぴったりと肌についた胴着に細やかな襞あしらいの寛やかにふくらんだスカートを身に着けた、ハンガリー風の民俗衣裳が稚児めいた愛くるしい娘たちで、可愛らしい足は赤革の細身の長靴にすっぽりとくるまれていた。その柳腰に手を回したり、接吻を盗もうとしても、なすがままに微塵も勿体をつけようともしなかった。そもそも私は野戦の生活からかかる手軽な色事の好みを保持しつづけていたので、この愛らしい蓮っ葉な小間使いたちが大層気に入っていたし、また近隣の小城主たちが聖ミクロスを訪れる際には、私こそは巴里やフランス宮廷の最新の流行を教える立場にある人間だとでもいうように、夫人たちがこぞって装身具や小間物の助言を求めたがるのであったが、それでも私は、おそろしく嫉妬深い殿方連中のどんな疑惑をも買ったためしとてなかった。

伯爵夫人は、名をエリザベート・ド・フンファルヴィという、その厳父がトルコ軍との交戦中ところもトランシルヴァニアの奥地で戦死した、さるやんごとない生れの若い娘をお側におかれていた。伯爵夫人はこの娘に熱い愛情を濺がれ、およそ親身の姉が妹にたいして持つすべての心遣いをもってエリザベートの身の周りをくるんでいた。伯爵夫人が潑溂として陽気であるのにひきかえ、エリザベ

ートは内気で感じやすい娘であった。讃め言葉を捧げられると、頬を染めて上気したり、一度など私が彼女の前で騎士グリュックの新しい歌曲を唱うと、突然涙にかきくれさえしたこともあった。

城の常連たちの間にあってもっとも風変りな人物といえば、疑いもなくコルネリウス・ド・ヴィンダウ男爵であった。男爵は聖ミクロスから二マイル余りほどの、キスファルー村近在にある、蒙昧な村民たちの噂では妖術師どもが夜宴を張るというなかば朽ちかけた古塔の一際高く聳え立つ異様な邸宅に居を構えていた。齢の頃はおそらく五十歳位であったろう、その痩身と醜怪さとは人目を敲てるほどであって、男爵が、さながら箍のように脇の肋骨が張り出した見るも哀れな二頭の駑馬に曳かせた、古色蒼然たる四輪馬車から降り立つときには、従僕たちも真面目な顔を保つのが精一杯であった。不器用に穿いた靴下は葡萄の副木そっくりのその腓のあたりで螺旋状に捩れていた。燕尾服の垂れ尾がひらひらと風に靡き、衣裳がまるで身体に合わないといった風に見え、鼻は先が尖って鼻孔が大きく空ろになり、おまけにこの奇妙な顔つきをいやが上にも完璧なものにするために、彼の上顎からは二本の長い犬歯がにょっきりと突き出して、これは小供たちをふるえ上らせるのにおあつらえ向きであった。

城付司祭の、尊者の風格のある老神父は、とどのつまりは極楽トンボの、賭事ともなればややもすればいんちきを働く悪癖のある好漢であったが、男爵にはほとんど敬意を払っていなかった。神父が見事なラテン語を操りながら断言するところによれば——彼はハンガリー語とラテン語しか話さず、そのラテン語もイタリア語風に発音するのであった——男爵はその遺産をことごとく賢者の石造成のために蕩尽してしまい、淫夢魔と取引をしており、またいつの日かかならずや地獄の業火に焼かれるであろうというのであった。エルデリィイ伯爵はその件に関しては肩をすくめてこう語るのだった。

「ヴィンダウはアルベルトゥス・マグヌスやら錬金術やらの本を読んで、すっかり理性を失ってしまった老狂人にすぎません。しかし、あれは大層博識な人でしてね、親友だった私の亡父の旅行にはいつも同行していたものでした」

*

ある秋の日の夜のこと、私たちは大広間に集っていた。音楽の響きは歇み、庭園の樹立ちをはげしくゆすぶる風の音が耳についた。夜の鳥たちがけたたましい叫び声を上げた。

――苦しんでいる魂のようですこと」若いエリザベートが言った。

――幽霊をお信じになりますか、お嬢さん」私は微笑みを浮べながらエリザベートに訊ねた。

――信じてはいけませんかな?」とヴィンダウ男爵が言った。

――お国では読まれていないようだが、英国のウィリアム・シェイクスピアがどこかで書いています、〈この大地と天空との間にはわれわれの哲学では測り知れぬ種々の物がある〉とな。エリザベート、そなたがお望みなら、また伯爵夫人のお許しがあれば、世にも不思議な、しかも断じて作り話とは思えないような話をどっさりお聞かせできるのだがな!」

エリザベートは返事をしなかったが、伯爵夫人が拍手で迎えた。

――お待ちかねでしたの、男爵様。私どもが怖がることなどご心配ご無用ですのよ。私は恐ろしい物語が大好物!」

ヴィンダウは腰を下ろし、エリザベートをひたと見つめながら語りはじめた。

――前世紀初頭のことですが、マーグデブルクにアルノルト・ディットマイヤーという名の医者が

いた。大層名が高かったので、二十マイル四方から診断をうかがう者が押しかけたほどの人です。ディットマイヤーの才能は彼に払われた敬意と富に見合っていた。それでいて当人は鬱々として楽しまなかった。というのも、ディットマイヤーの望みは世間のあらゆる人間に自分を現在過去を通じて最高の識見ある医学者と認められることにあったからだ。さて一夜、ディットマイヤーは書斎で解剖学の論文の頁を繰っていたが、そこへ灰色の服を着た見知らぬ男が一人現われた。ディットマイヤーは男を患者だとばかり思って病態を訊ねはじめたが、相手は彼の言葉を遮って言った。

——私は生れつき病気に罹ったことはない、誓って、一遍もないのだ。そうではなくて、私は知性のある人物との交際が好ましいのだし、貴殿はドイツ最高の十人か十二人の医者のなかの一人だ』

医者は思わず顔をしかめたが、無理に笑顔を作って、

——そういうことになっているようですな。しかし、御覧の通り、まだ勉学中の身です』

——そう』と見知らぬ男は口ごもって、

——要するに問題は第一人者になること、それだけだ！』

——お言葉だが、ああ！　古代にはじまって今日にいたるまで』とディットマイヤーは嘆息を洩らしながら、

——発見すべき何が残されているというのです……』

——生命の秘密、死の秘密がある』

——神はそれを知ることを留保されたではないか！』

見知らぬ男は口を歪めて言った。〈神は、その知識を見出した者はおのれと対等となるがゆえに、わが身のために探究を妨害したまでだ！〉〈神の冒瀆は慎しむがいい〉と医者は叫んだ。そう言った

瞬間である、ディットマイヤーは見知らぬ男が立ち上がって、いまにも天井の梁に触れそうなまでにみるみる大きくなるのを見た。男の眼が燃えさかる炭火のようにきらきらと輝いた……」

話がここまできたとき、エルデリィイ伯爵がどっとばかり笑いこけたものである。

――何という他愛のない話をして下さるお方だ！」

だが伯爵夫人はエルデリィイ伯爵に批難の眼差しを投げた。

――寒いわ」エリザベートが慄えながらつぶやいた。風はいよいよ激しさをつのらせていた。煖炉にまた薪がつがれた。

――野分(のわき)だ」と伯爵が言った。――この平野には風の力を挫く障害物がまるでないので、嵐がいつもすごい荒れ方をするのです」

――お話をお終いまで聞かせて下さいな、ヴィンダウ様、後生ですから」伯爵夫人が請われた。

ヴィンダウは話をつづけた。

――悪魔は、と申すのも、それは悪魔だったからなのだが、ポケットから一本の小壜を取り出すと、医師に向って申した。

――この薬壜のなかには、貴殿が競争仲間を打ち負かして栄冠をかち獲るよすがとなるものが入っている。この薬液を数滴用いて癒しえぬような病は、どこを探しても見つかるまい』

――で、値段は如何程かな？』

――これは差し上げる』

――しかし壜が空になったら？』

――いずれまたお目にかかりにこよう』

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c